新たな始まり

皐月

それは、急な友人からの誘いだった。週の真ん中の水曜日。仕事から帰って夕飯を食べ終わり適当にテレビのチャンネルを回している時、テーブルの上に置いていたスマートフォンが光った。高校時代の友人の綾からの電話だ。

「もしもし、なっちゃん。久しぶり。急なことなんだけど、今週の土曜日遊びに行かない？」

久々の電話に嬉しかったのもつかの間、急な遊びの誘いだった。ちなみに私の本名は、相川夏菜。とある会社で受付嬢をしている。高校の友人からはなっちゃんと呼ばれている。今からちょうど一年前。大学のサークルの先輩との再会により今までの自分の思いに終止符を打った。桜並木も気持ちいいぐらい満開であれからもう一年がたったのかと思うとあっという間だ。振られた直後はやはりショックが大きく、今電話をかけてきている綾には相当心配をかけた。でも、綾のおかけで今は仕事に打ち込むことができて割と充実している。さて、話がだいぶ飛んでしまったかもしれないが、綾の話によると二十代後半で彼氏もいないで仕事に没頭している私を見かねて綾と綾の彼氏とその彼氏の友達で遊びにいかないかというお誘いのようだ。

「ねぇ、なっちゃん。たまにはパァーっと遊んで楽しもうよ」

「うーん。まぁ、たまにはそういうのもいいかな。分かった。行くよ」

「やったー。じゃあ、場所は……」

それから、遊びに行く場所や自分たちの近況報告をしたりと話は夜遅くまで続いた。

次の日から、久しぶりに男の人と遊ぶということでどんな服装で行こうかとか、ちょっとしたダイエットをしてみたり、何だか初デートに行く女子高生みたいな感じで、自分でも可笑しいなと思いながらもそれを楽しんでいる自分がいてなんだかんだで楽しい毎日を過ごしてる。正直、まだ自分がこんな思いを抱いていることに一番驚いている。後二日もあるなんて。土曜日が待ち遠しかった。

そして、当日。十時に最寄りの駅でみんなと待ち合わせしていたのだが二十分も前に駅に着いてしまった。さすがにまだみんな来ていなかったようなのでとりあえず改札口前で待つことにした。十分前になると綾と彼氏が来た。

「おはよ、なっちゃん。私たちが一番だと思ったのに早いね」

「うん、思ったよりも早く着いちゃって」

綾は、そっかそっかと言いながらも私の方をにやにやしながら見ている。恥ずかしくなって下を向いていると綾の彼氏の準君が綾に笑いながらも怒ってくれた。準君とは何度か

会ったことがあり、綾とはもう一年ほど付き合っている。いつもラブラブで見ていてほんと幸せそうだなっていつも思う。綾と準君と話していると、こちらに向かってくる男性が見えた。
「悪い。遅れた」
その男性は遅れているのかと思ったのか申し訳なさそうにそう言った。短髪で背が高く、黒縁の眼鏡をかけて優しそうな雰囲気の人だった。
「久しぶりだね、健君。なっちゃん、こちらが健君だよ」
「初めまして、相川夏菜って言います」
「斉藤健です。よろしくね。なっちゃんって呼んでいいかな？」
「もちろん。私は何て呼べばいいですか？」
「同い年だしタメロでいいよ。普通に健でいいよ」
「分かった、じゃあ、健君って呼ぶね。今日はよろしくね」
たったこれだけの会話でも緊張してしまってちゃんと話せているかと気になって仕方なかった。簡単な自己紹介を済ませると綾の掛け声で電車に乗ることに。電車の中でも健君は色々話かけてくれて、段々自分からも話かけていけるようになっていた。話によると、準君とは仕事の同期らしい。そうこう話しているうちに目的地の場所にたどり着いた。今日訪れた場所は最近できたと評判の水族館。建物自体すごく大きく、色々な種類の魚がいるらしい。私はドキドキしながら水族館の中へと入っていくことに。入り口から魚がいっぱいで子供のように口を開けたままだった。私はそれほど興奮していた。
「なっちゃん、楽しそうだね。そんなに水族館好きなの？」
健君に笑われながらそう言われてしまって、私は自分でもわかるぐらい顔が熱くなっていく。もう二十代後半だというのに恥ずかしい。でも、久々の水族での興奮は収まらず写真をたくさん取っていった。ゴマアザラシとイルカの時のテンションは今日最高に。一通り見て回りみんなが満足したところで丁度お昼もまわっていたので近くのレストランで昼食をとることに。
「この後どうしよっかー」
料理を待っている間に綾が切り出した。私も水族館の事ばかりで考えていなかったからその後の事は何も考えていなかった。みんな悩んでいると、
「確かこの近くにボーリング場なかったっけ？」
準君がそんな提案をしてくれた。
「ボーリングかぁ。最近行ってなかったし、行こうぜ」
「私も久しぶりだなぁ。なっちゃんはどう？」
「うん、ボーリング好きだし行きたい」
こうして、満場一致で昼食を食べ終わると早速ボーリング場に行くことに。今日は休日という事もあって、家族連れや友達同士、カップルなど多くの人でにぎわっていた。そして綾の提案で二対二で対決をすることに。綾と準君、私と健君といった組み合わせで対決

することに。
「なっちゃん、頑張って勝とうな」
対決ごとには俄然やる気が出る私だが健君の一言でさらにやる気が出てきた。そして対決が始まりいきなり相手チームはストライクを出した。負けてられるかと気負いしすぎた私はいきなりガーター。ガーターを出した時の恥ずかしさは半端ないが、健君が励ましてくれた。それから調子が出てきてようやくストライクが出た時には子供のようにはしゃいでしまった。でも、健君も一緒に喜んでくれてハイタッチをしてくれた。対決は思っていたよりもいい勝負だったが、五点差で負けてしまった。でも、こんなに何かに夢中になったのは久しぶりだったのですごく楽しかった。ボーリングが終わったころには日も沈み良い時間だったので駅に着いて解散することに。
「なっちゃん、もう遅いし送っていくよ」
「え、家この近くだから大丈夫だよ」
「何言ってんのなっちゃん。こういう時は素直に甘えちゃっていいのよ。私は準と帰るから」
そういって、綾は準君と帰って行ってしまった。健君と二人きりになった私は、綾の言うとおり送ってもらうことに。健君は本当に話すのが上手で、私も気楽に話せるようにまでなっていた。話していると、あっという間に私の家に着いてしまった。
「そうだ、なっちゃん。今更だけどメアド交換しない？」
「あ、そうだね。うん、しよっか」
メアドを交換した私たちの間にはシーンとした空気が流れていた。もう一日が終わってしまったんだなと振り返っていると、
「今日はほんとに楽しかったよ。初めて会うから最初は緊張したけどほんとよく笑ったよ。またご飯行ったり、遊んだりしようよ」
「うん、私も楽しかった。また遊ぼうね。今日は送ってくれて本当にありがとう」
「おぅ。さあ、段々冷えてきたし早く家に入って。また連絡するよ」
そういって、健君は帰って行った。健君を見送ろうとしたが家に入るように言われたので、そこで健君とは別れた。

家に入って、カバンからスマートフォンを取り出すと同時に綾からの着信が鳴った。今日も話が長くなるなと思いながら私は通話ボタンを押した。
「もしもし」
「なっちゃん。何か楽しそうな声だけどどうしたの？」
「いや、なんでもないよ。綾から今日中に連絡は来るだろうなと思ってたけどこんなに早く来るなんて思ってなかったから」

「だって、もう聞きたくてうずうずしてたんだから。で、で、今日はどうだった？」
「綾らしい。そんなに慌てないで。ちゃんと話していくから……」
こうして、綾との話は夜遅くまで続いた。健君の事は会ったばっかりだし恋愛対象とかそういう目では見れていない。少しづつ前に進んでいけばいいなと思っている。私と健君との関係はどうなっていくかは分からない。でも、どんなことがあろうともいろんな人との関わりを大事にしていきたい。
健君とのその後は皆さんに会うことが出来たら報告したいと思います。
「ちょっと、なっちゃん聞いてるのー？」
「聞いてるよ」
その前に、綾の相手してきます。

終わり